九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

戦後日本における解放教育思想の形成過程とその葛藤に関する研究 ： 「解放の主体」形成に着目して

板山，勝樹

https://hdl.handle.net/2324/7362179

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（教育学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名	板山　勝樹
論　文　名	戦後日本における解放教育思想の形成過程とその葛藤に関する研究―「解放の主体」形成に着目して―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　野々村　淑子 副　査　　九州大学　　教授　　江口　　潔 副　査　　九州大学　　准教授　鈴木　　篤 副　査　　九州大学　　教授　　飯嶋　　秀治

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、一九四〇～七〇年代の解放教育、同和教育を論じた教育実践者、教育運動組織者、教育学研究者らの思想の構造と展開を精査することにより、「解放の主体」形成という、戦後日本の部落解放運動史に位置づく解放教育の最大原則の基層を歴史的に究明したものである。まず、一九四〇～六〇年代の全国同和教育研究協議会において、従来の融和教育への批判から展開された、観念か実態か、一般か特殊か、教育実践か教育運動か、という論争と、それが各々後者に傾斜していく様相を明らかにした。次に、この、被差別部落の特殊な差別の実態を変革していく運動を進めていく主体を形成するという思想が、一九六〇年代にかけて、小川太郎を中心とする教育学者等によって精緻化、構造化される過程を解明した。それは、生活指導と教科教育、即ち人格形成と学力獲得の統合論であり、またそれを批判的に継承した思想群の分析である。その後一九六〇～七〇年代において、「解放の主体」形成論は、一九六五年の同和対策審議会答申が示した「格差是正」戦略による部落の子どもの「低学力」克服論との葛藤が生じ、後景化される。最後に論じられたのが、その実相、および、葛藤への対抗、内部批判として反差別の論理を軸に「解放の主体」形成論が確立されていく過程である。解放教育については、国民教育、民主主義教育の原則に最も適合していると位置付けた小川の議論を端緒とし、戦後日本の教育学において度々言及されてきた。本研究の独自性は、戦後解放教育の基盤である「解放の主体」形成論の歴史的展開過程の解明であり、解放教育思想史研究に貢献すると共に、主体形成、人権保障という近代教育を問う概念の変容・展開過程を解放教育論において内在的に検証し、戦後教育学に一石を投じたものとして評価できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位に値するものと認める。